



ヤマトタケルを偲ぶ

「東海道歴史文化回廊」ルートマップ①



亀山市

ヤマトタケルをめぐる人々

ヤマトタケルとオトタチバナヒメ

ヤマトタケルには『日本書紀』では3人、『古事記』では6人の妃がいます。その両方に共通する妃が、フタチノイリビノヒメとオトタチバナヒメです。フタチノイリビノヒメは後に仲哀天皇となるタラシナカツヒコを生みます。もうひとりのオトタチバナヒメは、東国へ赴く途中の三浦半島から房総半島へわたる海路（走水の海）で荒れ狂う海を鎮めるため、海中に身を投げたとされます。オトタチバナヒメの死を悼んだヤマトタケルは東国を離れる際に「吾妻はや」となげいたことから、関東地方のことを「吾妻」と呼ぶようになったとされています。このオトタチバナヒメについて、亀山には忍山神社の祀官であったオシヤマノスクネの娘であるとの伝承が遺されています。



④たにおり

三重県の地名由来

『古事記』では、伊吹山で病を得たヤマトタケルは、次第に病が重くなり現在の四日市市付近にいたって歩くことも困難になりました。タケルは「私の足が三重に折れ曲がってしまった（三重の勾り）ように、随分疲れたものよ」と言ったことから、その地のことを「三重」と呼ぶようになりました。これが三重県の名の由来です。三重の名が県名になったのは、明治の初めに四日市（当時は三重郡）に県庁が置かれた際に、その県名を「三重県」としたことによるものです。

国徳歌

「夜麻登波久爾能麻本呂婆多多那豆久阿袁加岐
夜麻暮母禮流夜麻登志宇流波斯」

（大和は国のまほろば たたなづく青垣 山籠れる大和しうるわし）

これは、ヤマトタケルが死の直前に故郷の大和国を偲んで謡った「国徳歌」です。周囲を山々に囲まれた大和盆地の景観を謡ったもので、現在でも奈良県をイメージ付ける表現として「まほろば」や「青垣」がよく使われています。

忍山神社 ② ③

野村町の忍山神社は、延長5年（927年）に完成した『延喜式』にその名が記載された延喜式内社です。もとは愛宕山（押田山）に鎮座していたとされますが戦乱により焼失しその名も失われていました。明治41年（1908）に旧亀山町内の野村地区の能牟良神社などを合祀して、白髭神社と呼ばれていた社の地を忍山神社としました。忍山神社には、オトタチバナヒメ（弟橘媛）の生誕地との伝承があります。また、近くにはオトタチバナヒメの父とされるオシヤマノスクネ（忍山宿禰）の墓とされる長塚やお姫塚などの古墳があったと伝えられます。毎年10月14日の大祭には、傘鉾（亀山市指定無形民俗文化財）の巡行が執り行われます。

ヤマトヒメ

ヤマトヒメは景行天皇の姉で、ヤマトタケルのおばにあたります。ヤマトヒメは父垂仁天皇の命を受け、皇祖神をまつるのに最も適した地を探して、諸国をめぐり、最後に現在の伊勢神宮の地に定めたとされています。この途中で6ヶ月滞在した「鈴鹿小山宮」がその後、忍山神社となったと伝えられます。

連理の榊

能褒野神社拝殿左奥に、「連理の榊」と呼ばれるサカキの霊木がありました。あたかもヤマトタケルとオトタチバナヒメが手と手を取り合っているかのよう、隣り合う2本のサカキが高さ3mほどの位置で横に伸びた枝でつながっていました。このように他の木と枝などがつながった状態を「連理」といい、男女の深いつながりを示すたとえとしても使われます。残念ながら最近まであった榊は枯れてしまい、次代を育成中です。

亀山の地名由来

若山町から野村町にかけての小丘陵である愛宕山は、かつては押田山と呼ばれていました。この山は、忍山神社が現在地に移るまで鎮座した地であると伝えられています。この山こそ、ヤマトヒメが皇祖神を奉じて各地を巡行した際に6ヶ月滞在した「鈴鹿小山宮」の地とされたことから、この山のことを「カミヤマ」とよび、これがいつしか「カメヤマ」と呼ぶようになったといわれます。いくつか説がある亀山の地名由来のひとつです。

歴史の中のヤマトタケル

『古事記』と『日本書紀』

ヤマトタケルの事跡について直接書かれた史料は、『古事記』（和銅5年（712）完成）『日本書紀』（養老4年（720）完成）しかありません。現在語られるヤマトタケルの生涯はすべてこの二つの歴史書によるものです。ただ、『古事記』では、ヤマトタケルを「倭健命」、ノボノは「能煩野」とし、『日本書紀』ではヤマトタケルは「日本武尊」、ノボノは「能褒野」と表記するように、両者には内容などいくつかの違いがみられます。なお、現在宮内庁が使用する表記は、『日本書紀』によるものです。

「ノボノ」はどこに？

「ヤマトタケル」の墓は、江戸時代にはその場所がわからなくなっていました。江戸時代の国学者が行った古代史の研究では「ノボノ」に関しても探り上げられ、旧鈴鹿郡内（亀山市・鈴鹿市の一部）にある複数の古墳がその候補地として挙げられました。「伊勢国鈴鹿郡」以外に分らない以上、結論の出る論争ではありませんが、各古墳の形状や出土遺物、立地、伝承などから検証を行っており、江戸時代後期に歴史を解明していきたいという熱意があったことを示しています。このような流れの中で、江戸幕府は、天皇・皇后陵を探し、これを修築する事業を行っていきます。

「ノボノ」を探す！

江戸時代最初にヤマトタケルの墓についての検証が見られるのは元禄12年（1699）に幕府が行った天皇陵などの修理記録で、この中にヤマトタケルの墓として「白鳥塚」をあげています。藤堂元甫は宝暦13年（1763）に完成した『三国地誌』において「白鳥塚」が「能褒野墓」として記されています。この他にも安岡親毅（『勢陽五鈴遺響』）、菅生由章（『鈴鹿賦』）も白鳥塚説をとっています。また、『東海道名所図会』などにも白鳥塚が「日本武尊陵」として紹介されており、江戸時代においては白鳥塚説が大勢を占めていたといえるでしょう。一方で、西田栄欽が武備塚説を提唱し、江戸の国学者建部綾足、武備神社神主の金森安芸守がこれに同調しています。

亀山藩と「ノボノ」

亀山城主板倉勝澄（在城1724～1744）は、武備塚を「能褒野墓」とする説を採り、享保14年（1729）から16年（1731）にかけて武備塚と武備神社（現・長瀬神社）の整備を行います。幕府をはじめ、白鳥塚説が主流を占める中で、独自に整備事業を進めている点が注目されます。なお、板倉家の後を受けて亀山城主となった石川家も明治まで武備塚説を継承してゆきます。

『続日本紀』と『延喜式』

『続日本紀』は延暦16年（797）に完成した歴史書で、ヤマトタケルについては、大宝2年（702）8月条に、ヤマトタケルの墓で地鳴りがしたので、使いを遣わした記事があります。表記は「古事記」と同じく「倭健命」が使われています。また、『延喜式』は延長5年（927）に完成した法令書で、このうちの朝廷で管理する陵墓の一覧である「諸陵式」に「能褒野墓」が見られます。これによれば「日本武尊」の「能褒野墓」は「伊勢国鈴鹿郡」にあり、陵墓の区域（兆域）は2町四方、維持管理のための番人（守戸）がおかれていることが記されています。これにより、10世紀前半にはヤマトタケル墓がどこであるのかは把握されていたようです。しかし、この記事以降、公的にヤマトタケルについて記されることはなくなります。



本居宣長と「ノボノ」

古代史の解明にあたって、『古事記』に注目したのは、松阪出身の国学者の本居宣長（1730～1801）です。宣長はその主要著作のひとつで、『古事記』の解釈書である『古事記伝』（寛政10年…1798完成）において、「能褒野墓」は白鳥塚であると主張しています。その一方で、田村名越（現・田村町）の丁字塚（能褒野王塚古墳）について、古代の陵墓にふさわしい形であるとふれています。門人であった坂倉茂樹は、「能褒野墓」に関する研究として、白鳥塚や丁字塚の現地調査を行ない、その結果を踏まえて白鳥塚を「能褒野墓」とする考えを示していますが、これまで誰も着眼していなかった丁字塚を調査対象に含めている点が注目されます。本居宣長が『古事記伝』に丁字塚について触れたのはこの成果が反映されたとみてよいでしょう。

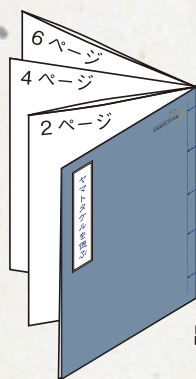
明治政府と「ノボノ」

明治政府は、天皇陵などの再比定を進める中で、白鳥塚が「能褒野墓」の最有力候補であったことに変わりはありませんでしたが、明治9年（1876）丁字塚も候補地のひとつに挙げています。内務省は明治6年（1873）に一旦は白鳥塚を「能褒野墓」として比定しますが、明治12年（1879）10月31日にこれを取り消し、新たに丁字塚を比定します。変更された理由は定かではありませんが、「前方後円墳」である古墳の形が陵墓にふさわしいと判断したと考えられます。これ以後、丁字塚は「能褒野墓」としての体裁を整えるべく整備され、宮内庁の管理下に置かれ現在にいたっています。

このパンフレットの折り方

番号通りにやまおり、たにおり、キリトリセンに沿って作成してください。冊子パンフレットになります。

①やまおり→①を折ったまま②キリトリ→一度開いて③やまおり→また開いて④たにおり→もう一度③やまおりに戻りページがつながるように組む→最終的に表紙と裏表紙が出るように⑤やまおり・たにおりを折って完成



出来上がり完成図

「東海道歴史文化回廊」とは？

亀山市の歴史・文化・自然などの地域資産を、「東海道」を軸としたさまざまな物語（ストーリー）でつなぎ、毎日の生活や活動の中で知り活かすしくみです。このしくみによって、それぞれの地域や亀山市全体、他の地域との交流の輪を広げ、亀山市としての一体感を創りあげてゆきます。

発行者

亀山市 市民文化部文化振興局 まちなみ文化財室
住所 〒519-1192 三重県亀山市関町木崎 919-1
tel:0595-96-1218 fax:0595-96-2414
Eメールアドレス bunkazai@city.kameyama.mie.jp



亀山市 HP
<http://www.city.kameyama.mie.jp>

発行年 2008年
改定 2015年

歴史の中のヤマトタケル

現在ではヤマトタケルが実在の人物ではないことは定説となっていていってよいでしょう。しかしながら、前では天皇に従わない者を「征伐」するといった見方で、古代史に登場する悲劇の英雄というイメージを越えて教科書や紙幣に取り上げられています。このため、かつて日本が行った対外侵攻や戦争への反省と、実在しない人物であるという見方から、大戦後は教育の場などでは意図的に取り上げない状況となっていました。ただ、最近ではヤマトタケル説話の誕生と「日本」という国家が成立してゆく過程が密接に関連しているものと見られています。また、近年では小学校の歴史教科書において「ヤマトタケルノミコト」が取り上げられています。